

- ① 《特集》暮らしから始まる環境共生社会
- ⑩ 《うおろ君の気にな～るゼミナール》
「アウトカム」って？
- ⑪ 《実録・市民活動「私のいちばん長い日」》
世界のコミュニティラジオの仲間たちと
出会ったヨルダンでの一日
日比野 純一（特定非営利活動法人エフエムわいわい 理事）
- ⑫ 《ヴォロ's トピック》
能登半島地震3か月
少ないボランティア その現状は
- ⑬ 《ヴォロ's トピック》
2024年度 市民活動関係の全国集会・大会予定
- ⑬ 《NEWS》
大阪府共同募金会の助成申請受け付けのお知らせ
- ⑭ 《V時評》
1.PTA改革の明暗～「ボランティア制」を生かすには
2.「参加の力」が生かされるために
～能登半島地震の復興に向けて
- ⑯ 《毎日NPO！ 山田発信 組織と事業の支援論》
どうするの？ 今どきの情報発信（後編）
山田 泰久（公益財団法人日本非営利組織評価センター 業務執行理事）
- ⑰ 《現場は語る～コーディネートの現場から》
小児医療をボランティアと支える
—ドナルド・マクドナルド・ハウスの活動
峯田 洋一（公益財団法人ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティーズ・ジャパン 人財開発室マネージャー）
- ⑳ 《情報ピックアップ》
- ㉑ 《U35のSocial Good》
医療機器管理教育システム「CeTrax」
- ㉒ 《この人に》
稲村 和美さん（前尼崎市長）
- ㉓ 《アゴラ／シネマ／ライブラリー》
Triangle(トライアングル)／『ラジオ下神白—あのととき
あのみちの音楽から いまこへ』／書籍紹介
- ㉔ 《晴れ時々ボランティア》
津田 尚子さん・津田 祐三さん（グラーツィア 他）



じぶんの町を良くするしくみ

赤い羽根共同募金

共同募金は、地域をつくる市民を応援していきます。

例えば……



地域で、子育てのお手伝いをしたり、
悩んでいるお母さん、お父さんの
相談にのる活動や、



障がいのある人が、まちで幸せに暮らせ
るお手伝いをする活動や、



地域で、1人暮らしや寝たきりの高齢者
に、栄養の整った食事を届ける活動や、



地域に住むみんなが「安心・安全」に
暮らすための活動や、

地域のいろいろな活動のために役立てられます。

- 中央共同募金会の全国共通助成テーマである「つながりをたやさない社会づくり～あなたは一人じゃない～」を助成テーマとし先進的なとりくみを支援してまいります。また、地域福祉活動への「重点助成分野」を「誰をも受け入れ誰もが参加できる地域づくり」「健康でいきいきと暮らし続けられる地域づくり」「生きづらさを抱える子ども・若者とその家族への支援」「災害ボランティア活動・減災活動への支援」「生活に困難を抱える人たちへの緊急支援」とし、これらの活動を重点的に支援してまいります。
- 国内で大きな災害が発生した時は、共同募金は都道府県域を超えて、被災地で被災した人々を助ける活動の支援も行います。
- 寄付金には、税の特典があります。会社など法人の寄付金は、全額損金算入できます。個人の寄付金は、所得税の所得控除または税額控除、住民税の税額控除の対象になります。



赤い羽根おおさか

www.akaihane-osaka.or.jp/
募金の使いみちはすべて、ホームページに掲載されています。

特集

暮らしから始まる 環境共生社会

【特集チーム】

正阿彌 崇子、村岡 正司、
永井 美佳、増田 宏幸、
百瀬 真友美



新型コロナ禍でキャンプが人気となり、グリーンツーリズムや農業体験など「自然」を感じる催しに人が集まる近年。一方で異常気象や自然災害が多発し、温暖化による地球環境の悪化が切実感を増している。自然環境・地球環境への関心が高まっている今、私たちは環境と共生する社会のために何をして、どんなしくみを作っていけばいいのだろうか。

「フィールドノート」 宿泊記

民話のふるさと遠野郷の北方約40キロの小集落、タイマグラ。ここに堺市出身の奥畑充幸さん、松江市出身の山代陽子さん夫妻が家族で営む民宿「フィールドノート」がある。山小屋のあるじを志していた充幸さんが早池峰山麓の当地へ移住、1988年に開業した。戦後建てられた農家の出づくり小屋（注）に最低限の手を入れた住居で客も宿泊まりする。

筆者が宿泊したのは2023年の初夏。沖縄と東北を結ぶ催しの打ち合わせで沖縄の友人Hと岩手県を訪れ、宿を探していた。そして偶然にも陽子さんは、本誌「この人に」の取材がきっかけで今も親交がある造形作家のめいだった。盛岡市内から車で2時間。宿の周囲にびっしりと積まれた薪が圧巻だ。玄關すぐに薪ストーブのある食堂と、オフの日には家族の居間になる客室が続く。友人が散歩に行こうとすると、陽子さんが熊よけの鈴を持たせてくれたのには驚いた。

コロナ禍以来、客は1組のみの受

け入れ。この日は充幸さん不在のため、現在は盛岡市内に暮らす次男の山代森さんが手伝いに。1988年に日本で最後に電気が通った地域というが、宿の主熱源は薪。生活用水は充幸さんの移住時から上の沢の湧き水をホースで家にひく。トイレは微生物の力で排泄物を堆肥に変えるコンポストタイプ。水を流す代わりに乾燥したコケをかける。できた堆肥で育てた野菜、近くで採れた山菜などを用いた料理を陽子さん、森さんと囲む。後で帰宅した三男の山代生さんも加わり、話が弾んだ。

「タイマグラはアイヌ語で『森の奥へ続く道』という意味なんです」と、陽子さんは2004年のドキュメンタリー映画『タイマグラはあちゃん』のチラシを取り出す。食と農の学びを重視する自由学園を卒業し、東京の出版社で編集の仕事をしていた陽子さんは、同級生からここを紹介され常連客に。その後充幸さんと結婚、1995年に移住した。

映画の主人公、向田マサヨさん（2002年、81歳で死去）夫妻は、



写真提供 外間守朝（2ページと、3ページ右の計3点）

フィールドノート全景



コンポストトイレ

(注) 自宅から遠く離れたり、毎日の往復が困難だったりする耕地での農作業のため、一定期間居住する小屋。

≡ 宿泊を通じて視点が変わった！ ≡

アレルギー体質もあり、宿泊前から入浴時のせっけん使用を極力控えていた。宿泊を通じてこれが環境に配慮することにもなると実感し、今も継続している。



友人H



筆者

以前は水道の水を流しながら食器を洗っていたが、今は食器に直接洗剤をかけて洗ったあと、水ですすぐようになった。水量も節約でき、食器もよりきれいになる。



フィールドノート

住所：岩手県宮古市江繋第6地割58

電話：0193-78-2888

タイマグラばあちゃん DVD

澄川嘉彦監督作品
 (110分 / カラー / ©2004年
 ハヤチネプロダクション)
 ¥3,850 税込 (DVD特典に澄川
 監督のトーク所収)
 購入・お問い合わせはフィールド
 ノートまで



朝食には手作りのパンも



ヒバ製のおけ風呂。浴槽は充幸さんの弟が製作



宿を手伝う三男の生さん(左)と、次男の森さん



山代陽子さん(左)と、筆者の友人H

戦後入植した開拓農家の最後の一軒。充幸さん移住時の唯一の隣人だった。「冬は洗濯機も凍ってなかなか回しません。ばあちゃんに『お湯で解凍してやっとなら』と、『自分は手で洗うんだ』と。ハツとしました。ばあちゃんは『自然に寄り添う』『環境にやさしく』など言わなかったけど、私たちが忘れてきている大事なことを知っています

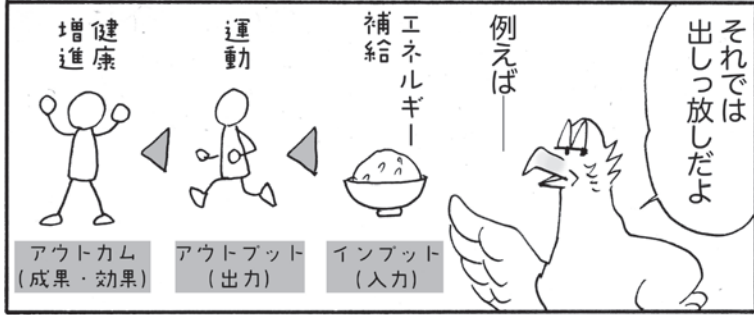
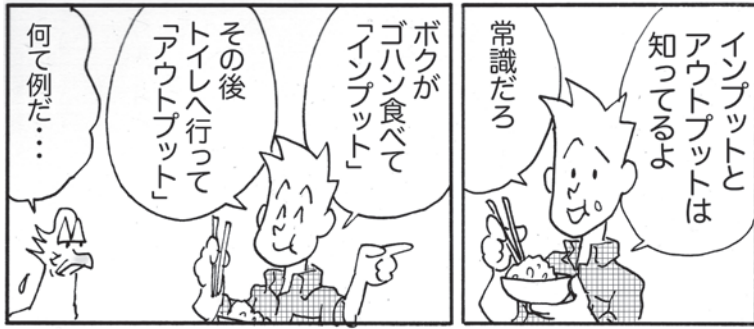
「たね」
 薪ストーブを囲んでの食事や薪で焚く風呂。凍みホド(じゃがいもの保存食)づくり、春一番のみそ玉作り。マサヨさんから受け継いだことははかり知れない。「自然の中で私たち家族とひとときを過ごし、旅から帰った皆さんの暮らしがより豊かになれば……。陽子さんは願う。」

編集委員 村岡正司

うお3君の 気にな〜る ゼミナール

Vol. 135

「アウトカム」って？



まんが ■ ラッキー植松



成果を示す用語として見慣れたアウトプットは元々コンピュータ用語で、入力（インプット）された信号から生まれた出力を意味する。転じて、たとえば講師や教材をインプットして講座を開き、その講座から生まれた受講者数や修了者数がアウトプットとしてカウントされる。

それに対して、講座の結果、受講生の意識や認識、行動にどんな変化が生じたのかを問うのがアウトカム（成果・効果）だ。また、アウトカムによって社会にもたらされる変化をインパクト（社会的変化）と呼ぶ。活動の成果・効果・社会的変化を視野に入れて活動を計画・評価しようとの視点から、これらの言葉が注目されてきた。さらに、インプットからインパクトまでを論理的な因果関係で示すロジックモデルの作成も広がっている。

ただし、何をもちって成果と考えるかは価値観に左右される面があり、成果の出やすい対象を選別したり、自尊心や安心など外形的でない要素についてアンケートの設計で恣意的に成果を示せる場合もあるなど、安易なアウトカム重視で弊害も起こり得る。ロジックモデルで風が吹けば桶屋がもうかる的な論理の飛躍が入り込むこともある。そもそも評価への当事者参加も大切で、これらの課題を認識した上での利用が必要だ。

編集委員 早瀬昇

ウォロ・バインダー、 いかがでしょうか？

ウォロ2年分(12冊)を
挟み込めるバインダー
(1冊500円+送料350円)です。
お問い合わせはウォロ編集部/office@osakavol.orgまで



2024年度 市民活動関係の全国集会・大会予定

8月10日^土
～11日^日

全国ボランティア推進団体会議（通称「民ボラ」）in 茨城（第41回）

対象 全国のボランティア・市民活動推進団体の役職員・スタッフ、関心のある方（ボランティア・市民活動センター、NPO支援センター、社協、自治体職員、NPO、ボランティアグループ、一般市民など、どなたでもご参加いただけます）
会場 ザ・ヒロサワ・シティ会館 分館（茨城県水戸市）
参加費 未定（4,000円程度）
定員 会場：80名 オンライン：100名
主催 ボランティア推進団体会議（民ボラ）（大会事務局 茨城NPOセンター・コモンズ）

9月7日^土
～8日^日

「広がれボランティアの輪」連絡会議30周年記念 ボランティア全国フォーラム2024

対象 ボランティア・市民活動の中間支援組織、ボランティア・団体、学生等の実践者など
会場 東北福祉大学国見キャンパス（宮城県仙台市）、1日目のみ会場＋オンライン
参加費 全日参加：5,000円 1日のみ参加（1日目・2日目どちらかのみ参加）：3,000円
オンライン参加（1日目のみ）：5,000円 ※学生の参加費は無料
定員 500名程度
主催 「広がれボランティアの輪」連絡会議／全国社会福祉協議会

2025年
1月18日^土

ファンドレイジング・日本2025（FRJ2025） *詳細未定

対象 寄付・社会的投資に興味がある方、非営利組織に所属するファンドレイザー、企業、学生
テーマ 今、必要とされるファンドレイジングのすべてを
会場 TOC有明コンベンションホール（東京都江東区） ※オンラインも予定
主催 日本ファンドレイジング協会

2月22日^土
～23日^日

市民の参加と協働を進めるコーディネーション研究集会 *詳細未定

対象 地域や組織のコーディネーションに携わる方、関心のある方
会場 龍谷大学深草キャンパス（京都市伏見区）
主催 日本ボランティアコーディネーター協会 同研究集会実行委員会

【学会年次大会予定】

日本NPO学会：6月15日（土）～16日（日）高崎経済大学（群馬県高崎市）

日本地域福祉学会：6月15日（土）～16日（日）文京学院大学本郷キャンパス（東京都文京区）

* 2024年4月10日現在の情報、編集部調べ

NEWS

大阪府共同募金会の助成
申請受け付けのお知らせ

■赤い羽根共同募金助成金

対象 大阪府内で行う民間社会福祉事業、更生保護事業、その他社会福祉を目的とする事業を行う法人・団体が、2025年度（25年4月～26年3月末）に実施する事業
受付 24年5月1日（水）～20日（月）

■河原林富美福祉基金助成金

① ボランティア活動支援事業
対象 大阪府内にて広域で福祉ボランティア活動を行い、一定の要件を満たす団体が、2024年度（24年8月～25年3月末）に実施する事業
受付締切 24年5月31日（金）
② 社会福祉協議会への地域福祉活動促進事業

対象 大阪府内の市区町村社会福祉協議会が、2024年度（24年8月～25年3月末）に実施する軽自動車購入事業または地域福祉活動促進事業
受付締切 24年5月31日（金）

詳しくは大阪府共同募金会ホームページをご覧ください。



赤い羽根おおさか 検索

U35の Social Good

第42回

これからの社会を担う35歳以下の社会起業家。素直な思いと自由な発想は、どんな商品・サービスを生んだのか。若き起業家たちの「物語」には、きっとあなたにも伝わる「熱さ」があります。

医療機器管理教育システム「CeTrax」

株式会社 Redge

代表取締役／CEO 稲垣 大輔さん

川崎市川崎区殿町 3-35-10 Reserch Gate Building TONOMACHI 21C

E-mail : info@redge.co.jp

設立：2022年5月 スタッフ数：8人（プロボノ含む）

臨医療機器管理教育システム CeTrax（シーイートラックス）を開発。国内外で同システムを活用した医療機器管理と教育のサポート、医療現場の業務効率化や経営改善などを行っている。神奈川県立保健福祉大学、岡山大学、神戸大学の大学発認定ベンチャー企業。

CeTrax



※画面は開発中のものです。実際の製品画面とは異なる場合があります。

Point 1 クラウド管理で医療機器の簡単管理を実現

Point 2 医療機器データベースでデータの利活用

Point 3 教育コンテンツで持続可能な教育を提供

提供（全三） R e d g e

日本の臨床工学技術を生かして 全ての人に医療の安全と質を届けたい

この事業を始めたきっかけ

Redge 代表取締役の稲垣大輔さん

さんは子どものころ、難民として暮らす同年代の子どもたちが海外にいることをテレビ番組で知り、「同じ命なのに、なぜこんなにも違う状況なのだろうか」と思っていた。また、祖母がパーキンソン病を患い、病気を治す手だてがないという状況も見てきた。これらの経験から、将来は医療、特に海外の小児、脳神経、救急領域の医療に携わりたいと考えるようになっていた。

受験期には大学の医学部を目指したがかなわず、それでも医療現場で人と関わる仕事を目指して、進学を決めたのは臨床工学技士の資格を取得できる大学だった。臨床工学技士は、医師、看護師らとともに医療機関で働く専門医療職。人工呼吸器や人工透析装置など高度な医療機器の操作や管理、メンテナンスを行う。

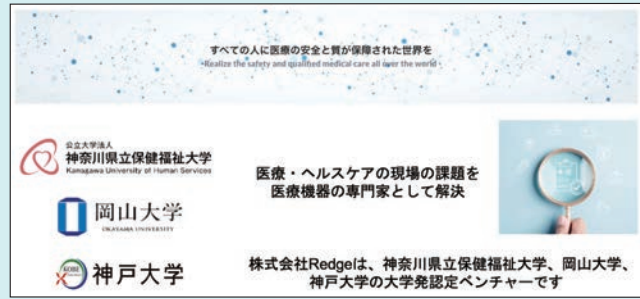
大学在学中、海外で医療支援をしたいとベトナムのNPOが企画するワークショップに参加し、現地の病院の実態を目の当たりにする。待合室には人が密集し、床に横たわっている人もいた。病室にはベッドが一つしかなく、ベッドで横になれず床に直接寝ている

患者もいた。使用している医療機器も劣化していた。この状況を見て、ここに臨床工学技士が活躍できる場があるのではないかと思った。

大学卒業後は臨床工学技士として病院で勤務。年に一度、1週間程度の有給休暇を取得し、海外で医療支援をするボランティア活動を約5年間続けた。アジアの多くの国は医療専門職の資格がなく、医療機器の保守管理が十分でないため、機器の寿命が短くなってしまっていた。貧困のために治療が難しい人々と出会い、改めて「命の重さは平等であるはずなのに、海外と日本で状況が違う」と感じて日々の仕事に対する向き合い方が変わったという。

「命の重さもそうだし、価値観はだいぶ変わりましたね。海外にはお金がないと亡くなってしまう世界がある。日本では僕たちの仕事が重要視されずに当たり前なこととされている。でも、やっぱり重要な仕事だと考えるようになってきました」

医療支援から帰国するフライトを待っていた時に、この課題を解決する方策として研究の道に進むことを思いついた。その場で大学院を調べ始め、働きながら通学できる大学院への進学



を決める。目指す分野に関する専門的な指導教員がいないうち、医療機器の管理・教育システムを開発を進め、2022年5月に大学発のベンチャー企業を設立した。

臨床工学技士という仕事

「機械を扱うことも治療の一つであり、誰が関わるかで治療の効果が変わってくる」と稲垣さん。臨床工学技士がいる場合といない場合では、現場の医療の安全性の点でも違いが出てくるという。病院によっては、個々の機器を熟知している医療機器メーカーに点検・管理を依頼している場合もあるが、医療現場では機器を単体で使用することは少なく、多くの場合、複数の機器を同時に使用する。臨床工学技士が携わることで、安全で安心な医療が提供できるようになり、患者の予後が改善することもある。また、メーカーに依頼すると臨床工学技士を配置する

より経費がかかるため、コスト面でも優位だと考えている。

さらに、医療機器を適正に使用する能力やそのための教育は見過ごされがちだ。稲垣さんによると、臨床工学技士を配置していない病院は全国に約4000カ所ある(注)。そのような病院では、臨床工学技士ではなく、看護師などが医療機器を管理している。医師が不足している場合は、患者の診療科と異なる医師が機器を使用するケースもある。

医療機器管理教育システム CeTrax

稲垣さんが開発した管理教育システムおよびサービスを利用すると、臨床工学技士が病院にいらなくても医療機器を効率的に点検・管理ができるようになります。他の医療職が本来の業務に集中できるようになる。臨床工学技士の人数が少ない場合や、医療機器の点検・管理記録を紙に記入している場合にも効果を発揮する。

システムでは、まず医療機器に関する情報を登録することで、各医療機器に対応したQRコードが発行され、QRコードは医療機器のデータベースと連携しているため、機器に貼付してお

けばその場で読み込んで詳細情報や状態を閲覧できる。それだけでなく、各機器の標準的な点検項目も示されるため、何を点検すればよいかわからない場合にも対応が可能だ。現場の状況に合わせて点検項目を編集することもできる。

システムのさらなる特徴は、臨床工学技士にチャットで相談できることと、機器に関する動画のコンテンツを視聴できることだ。通常は一人の臨床工学技士の経験や知識は勤務している病院でしか生かされないが、このシステムにはいくつもの現場の知見が蓄積されている。導入した病院は、熟練の臨床工学技士によるのと同様の助言が得られるのだ。

今後の展望

システムの利用者は、国内だけでなくミャンマー、カンボジアなどアジアにもいる。日本の医療機器は高機能で良質だが、現地の医療従事者にとってが高機能すぎて使いにくい。システムを運用する中で、どのように機器が使われているのか知ることができると、その情報を現地の医療従事者が使いやすい機器の開発、提供に生かしたいと考えている。

「海外に行くと、国が成長していく熱量を感じる。日本みたいな停滞感はない。日本の企業が海外と関わりながらいかにニーズに沿った機器を開発できるかが重要なポイントだと思っている。現地状況にマッチした製品を作って輸出できれば、医療機器産業が長い貿易赤字から脱することにもつながる。日本を盛り上げる手段の一つにしていきたい」と稲垣さんは語る。

編集委員 山中大輔

稲垣 大輔さん

1990年生まれ。臨床工学技士、公衆衛生学修士。大学卒業後、臨床工学技士として民間病院・大学病院にて勤務するが、途上国の医療支援ボランティアとして活動。神奈川県立保健福祉大学ヘルスインベション研究科修士課程に社会人入学し、東京大学「EDGE-PIX」(次世代アントレプレナー育成事業)、経済産業省主催「始動Next Innovator 2020」などに参加。ジャパン・ヘルスケアビジネスコンテスト2022・アイデアコンテスト部門グランプリなど、受賞多数。2022年5月、株式会社Redge創業。



(注) 全国の病院数は精神科・一般を合わせて2022年10月1日現在8156施設。(厚生労働省医療施設調査: <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/ryosd/22/dl/02sisetu04.pdf>)

Triangle (トライアングル)

幼 幼稚園の別棟をリーススペースとしてリノベーションしたTriangle (トライアングル)。

運営するのは大阪市旭区の大宮幼稚園だ。「もともと絵本を置いて図書室のように使っていたんですが、なかなか活用する機会がなくて……」と話すのは、主任の寺西絵美さん。保護者サークルなどでつながりを広げ、地域の人たちも巻き込んだ交流を増やせば、この空間が活気あふれる場になり、子どもたちの笑顔が増えるのではと考えた。課題は、どのように具体化するかだ。そんな時、隣接の城東区で古民家を飲食店などに再生し、地域活性化を行う「がもよんにぎわいプロジェクト(注)」を特集したテレビ番組を見る。「これだ」と思い連絡すると、共感した代表者が寺西さんをサポートしてくれるようになり、実現に向けて話が一気に進んだ。

Triangleはその名の通り、家庭・幼稚園・地域からなる三角形のつながりをイメージしている。「真ん中に入るの、いつも子どもたちの笑顔です」と、寺西さんはほほえむ。実際、Triangleの利用基準でいちばん大切にしていることは「子どもが笑顔になれるかどうか」だ。現在、定期開催される主なイベントは、クッキーやアクセサリー作り体験など。「保護者同士が参加し交流することで、子どもの話に広がり、いずれ子どもたちの笑顔につながれば」と願う。他にもコーラス練習や語り合いの場など、保護者参加の企画は多種多様。地域住民がマスターとしてお茶を提供し、誰でもホッと一息つけるように施設を開放する日もある。

2023年5月のオープンからまもなく1周年。Triangleは「つながりを生む場所」として、ますます地域の交流起点になりつつある。

編集委員 シュナイデル 恵里花



外観。トライアングルのシンボルが特徴的



キッズスペースもあり、利用者からは「子連れでも落ち着いて話せる」と好評



イベントの様子

Triangle
(トライアングル)
大阪市旭区中宮
三丁目16-6
電話 06-6951-6041
利用可能日時
基本的に毎日(応相談)
9時~21時

(注) 2008年より大阪市城東区の下町、蒲生四丁目(通称「がもよん」)周辺の住宅密集地に大正時代から残る古い建物を改修し、飲食店など新たな事業者を呼び込んで地域再生を図った。新規出店約40店舗中撤退はほぼゼロ。



教室を生きのびる政治学

岡田 憲治 著
晶文社、2023年4月
1870円(税込)

政 治は決して特別なことではなく、身近なことだと考えさせられる一冊だ。本書は小学校のPTA会長を経験した政治学者の著者が、主に中高生を対象に、「話し合い」や「仲間づくり」など学校の中でも起こることを取り上げ、政治と結びつつ説明している。著者によると永田町(国会)でも、商店街の会合でも、教室の中でさえ、人間の行動には同じ力学=「政治」が働いており、中高生も政治に巻き込まれているという。そのため、いろいろな人が多数集まる安定しない場所を生き延びるのに政治学は必ず役に立つと熱く訴える。たとえば「話し合い」の目

的は必ずしも「正しい結論を出す」ことではなく、全員が偏っていることを前提に共通点や相違点を整理することが大事であるという。話し合いの場で発言しづらいと感じる人には、他人の言葉に耳を傾けたり、議論の内容を記録したり、発言者を励ましたりすることの大切さを指摘し、それらの役割を担うことで議論に貢献できると提示している。「仲間づくり」をするのは、一人一人が弱くて小さい存在であるがゆえに協力することが必要不可欠となるからだが、必ずしも心が通い合う関係になくともよい。目的達成のためには、意見の食い違いが生じて冷静に対応し、お

のこの役割を担いながら、決定とその実行について協力し合える仲間が存在すればよいという。そして若い世代に対し、そもそも民主政治は失敗してもやり直すことを前提にしたシステム、という。「自分の弱さや未熟さを受け入れ、他者に適切に助けを求める決断のできる人間」になることこそが「自立」で、自分たちに起こったことを他人任せにせず、自分たちで話し合い解決してほしい、そしてまずは自分の身の安全や安心を大事にして、政治学の知恵を借りながら学校生活をサバイブしてほしい—などとエールを送っている。編集委員 阿部 太極

今月の作品

『ラジオ下神白』

—あのとときあのまちの音楽からいまこへ—



監督・撮影・編集：小森はるか
編集・整音：福原悠介
企画：アサダワタル
製作・宣伝・配給：ラジオ下神白
2023年 | 日本 | 70分
2024年4月27日より全国順次公開中



イラスト：杉浦健

●今月の館主

しまだ りゅういち
島田 隆一

2012年、監督作『ドクモイケナイ』で日本映画監督協会新人賞受賞。監督最新作は『二十歳の息子』（23年公開）。プロデュース作品に『桜の樹の下』『帆花』がある。現在、日本映画大学准教授。「ドキュメンタリー映画って、観るよりも作る方が数十倍面白いよ!」いつも思います。

『ラジオ下神白』

は、福島県いわき市にある復興公営住宅・下神白団地で暮らす人たちになじみ深い曲について話を聞き、それをラジオ番組風のCDとして届ける被災地支援を記録した、ドキュメンタリー映画である。

下神白団地には、2011年に起こった福島第一原子力発電所の事故によって、浪江・双葉・大熊・富岡町から避難してきた人たちが暮らしている。16年から始まった本プロジェクトは、文化活動家のアサダワタルが中心となって団地住民を取材し、交流を続けている。私は15年頃から福島県に通い始めたが、こんな被災地支援があったのかと驚いてしまった。簡単に言えば、「ラジオ作り」を口実に、団地に住む被災者と仲良くなるというプロジェクトなのである。

その手段として、思い出深い曲を語ってもらうというのが、また良い。誰にでも、自身の人生にとって大切な一曲というものがある。それは時に甘酸っぱい初恋の記憶と結びついたり、誰かの笑顔を思い出させてくれたりするものかもしれない。少しでも曲の思い出として語りやすい。そしてその曲を皆で聞けば、それぞれの思い出がよみがえり、初めて聞かされた曲の記憶を反芻しながら聴くことができる。時代も場所も一気に超えることができる。魔法の装置なのである。支援者と被災者が「友人」として交流する、そんな豊かな時間が丁寧に映し出されている。

映画のラストで、コロナ禍を迎える。私たちがとってもまだ記憶に新しいあの時期、プロジェクトのメンバーも団地に行くことができないうつが、そんな鬱屈した時間を、映画は強烈な仕掛けで乗り越えていく。私はエンドクレジットを観ながら、まさに映画の作り手と出演した支援者と被災者の人たちが結びつく瞬間に立ち会えたことに至福の時間を過ごしていると感じた。ぜひ、劇場で体験してもらいたい。

私の市民活動 Library 第61回



移民の子どもの隣に座る
大阪・ミナミの「教室」から
玉置太郎 著
朝日新聞出版、2023年10月
1870円（税込）

大阪の島之内地区にある、Minamiこども教室。この学習支援教室に通う子どもは皆、移民のルーツを持っている。きっかけは2012年4月に起きた、移民家庭の母子心中事件だった。母と娘は一命を取り留めたが、小学校に入学したばかりの息子が死亡。当時の校長が「あの時、何かできんかったんか」との思いから外部と連携し、翌年に教室を開いた。新聞記者の著者は取材を兼ねたボランティアとして、9年以上通いつけている。本書には教室に通う子どもはもちろん、親や支援に携わる大人も登場する。書かれて

いる子どもの成長に胸を打たれる一方で、支援者が「どこまでできるのか」と葛藤する場面から、市民活動の難しさを知った。それでも子どもが抱える「しんどさ」を大人が受け止め、勉強面や生活面をサポートすることで、安心できる場所へと変わっていく。こうして子どもの「居場所」を作る様子を読んで、行動する大切さを改めて感じた。その後、著者は移民について学ぶためロンドンへの留学を決意。そこでまた、移民の子どもと関わるボランティアに携わった。二つの支援教室を経験し、どちらも「違い」に対する肯定的なメッセージ

を発していたと語る。著者自身も一貫して、誰もがたどってきたそれぞれの「ルーツ（routes = 経路）」を大切にしていることがうかがえた。支援教室は「マジョリティとの『違い』のみならず、マイノリティどうしの『違い』にも触れる」場所だという。そんな場所を少しでも増やすことが「多文化共生」へとつながるのではないだろうか。どんな形であれ行動を起こすと誰かの「居場所」になり、関わる人の心をつなげられる。その実例が、この一冊に詰まっていた。編集委員 シュナイデル 恵里花